



官版

語彙

卷六

ホ 2  
4706  
6



門ホ 2  
4706  
巻 6

明治十四年五月

# 語彙 伊之部

文部省編輯局



## 語彙卷六

### 伊部一

言を發し詞を活用く言の多しめ小多く  
りり記中斯理都斗用伊由岐多賀比 万九

伊渡為兒者  
又十六 伊拾持來而

詞の下ふきりいりてよこのい同ト  
呼ぶことなかり 繼體紀 愷那能倭俱

吾伊輔夷府 枳能朋樓 續紀十  
從三位藤原朝臣麻呂伊 又十七 百濟王敬福伊

又わのものをたえ 射りて  
むらびて

人の身體の中ふある六府の一なり六府  
とい小腸膽膀胱大腸胃三焦を云なり

和膽 伊和中精  
之府

ネイル 記上 麻多麻傳多  
い

吾彙卷六

5

10







いろうかん (音)

いろうき (音)

いろうきよ (音)

いろうきよ (音)

いろうきま (音)

いろうく (音)

いろうろ (俗)

いろうん (音)

いろうん (音)

いろうげい (音)

物まづらふあはらひなつらぬを云あり

雲州消息下 山亭幽閑俗事如念を

句題百首 憂喜皆心灰  
大嘗會の悠記の宮の事とあつらふ所を

以字 悠記所 大嘗會之時云左也

あいらいなくぬ住處をいふ  
○幽居

れりろく遊び樂しむをいふあり  
雲州消息上 遊興之事于今無其招

うねおをうをいふ  
○憂懼

休息又い綴を  
あつらふあり

遊女小同ト 十訓下 肥後國の遊君  
檜垣姫の後撰集小入

いろうんは同ト  
○遊觀  
遊興の為小まを藝能を

いろうげん (音)

いろうろ (音)

いろうど (音)

井殿是依殿富門院御猶子儀也 太平九 河野對馬の守がいらつらふ七郎道遠  
とて今年十六小なりける若武者父をうたせとあわりひたん

いろうど (俗)  
物称 虹を西國トて

いろうん (俗)

いろうあ (音)

いろうあ (音)

いろうあ (音)

いろうあ (音)

心の閑暇ある  
人をいふ

あめめつるをいふ  
○優賞

あつらふをいふあり

以字 優恤シヤ  
あつらふをいふあり

以字 由緒シヤ  
あつらふをいふあり

いろうまふく (音)

いろうまふく 同上

いろうまふくか (音)

○有職  
典故 小 明 あり 人 を  
いふ ○有職家

いろうぜんぞん (俗)

五彩を以て種々の画様を先出を法かり  
其始梅丸友禪といふ人の創意より出たり  
凡ての道小 明 あり 人 をいふの 有 識 の 字  
を用ひたるを後少の 有 職 と かり かくしや

いろうそく (音)

モノシリ あど云むが如し 宇 俊 隆  
このりたるも又いふに死のうそくあり 又 上 父 子 を 下 人 あり 子 の う そ く  
あまの心ゆくかきしもの 源 神 時 の う そ く と  
天の下をあびり給へるさまことあめまが

いろうそく (音)

上 小 同 上 同 上 同 上 同 の 轉 かり  
宇 甫 の 宴 かのぬいろうそくをなまこと

いろうたい (音)

ゆるやあ人をいろうたいを  
いふ ○優待

いろうたう (音)

どりまかりなり 遊 ぶ を  
いふ ○遊蕩

いろうちやう (音)

まがまが物小長ドたうを  
いふ ○優長

いろうちやう (俗)

心落つる 閑 暇  
かりそいふ

いろうちらよ (音)

拾遺集をけがと云云 江口の遊女 妙の新古今の作者也 遊女記 相傳  
曰 雲客風人 爲賞遊女 自京洛河陽之時 愛 江口人  
陰陽家あり八卦小 配 當 人 々 の 年 々 の  
て 禁 忌 する 方 角 の 名 かり 拾 芥 下 八 卦 忌

いろうねん (音)

事謂遊年 禍害 絶命 方 等 件 三 方 不 可 犯 土 造 作 又 遊 年 禍 害  
絶命 此 方 以 造 作 出 行 移 徙 嫁 娶 等 方 事 皆 可 忌 之

いろうそく (音)

心の 隨 小 遊 ぶ をいふ 雲 州 消 息 上  
水 石 之 地 可 遊 放 侍

いろうび (音)

やま 平 他 宇 類 抄 優 美 曰

いろうひり (音)

左衛門入道 宗吾大草紙 兩判の 表 卷 右 等 筆 の 時 以  
右 筆 の 人 位 高 く とも 日 の 下 小 名 を 書 べ

いろうひり

いろうひり 筆 とる 役 をいふ 平 家 一 た だ け  
轉 じて 文 道 の 意 小 あり 平 家 一 た だ け

いろうひり

いろう







このみありあり見の音ゆゑのりゝと哭きし其の間  
生見き香河より此方より薫りたる

いかりき 訓引判

あつくり死意のりゝをかき移りしりや  
いかりの條下見合まき 河海葵 猛辛い

いかりき 體也

いらいこと 俗

巖き事ゆく事の甚しきをりし轉して物の  
あまれたる事ゆゑなり イヤウサニ又タク

いかりき 意あり

衣架小同ト  
古節衣標

いかり 音

ひつららあり 一向三實十七 府司一向交  
易奉進 宇祭使 一かろふあつらう ちのりん

源 五音 其かろふいりうふつらうあつらうあん 落窪ニ ころひより一向

いかり 俗

巖くの音便 ヒトウ キツウ 又 イカウ澤山 小  
あつら イカウギヤウサニチ あつら のいかりあり

いかり

疑辭 ドウ 又 ドウヤウニあり 古今誰語 身の上  
てつ心をだすもなつらキー つひのりや

ちかるとあつら 竹御とちかんのりやわさつらと問へバ 又 ドウカトヤウニカ  
あつらあつらあり 古今意 秋風西山の水のちのりうへんの人とちかんのり

とちかんのり 源 若紫 ちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりや  
ア のちかんのりや又下は意をちかんのりやちかんのりやちかんのりや

ちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりや  
○又 ドウヤウ のちかんのりや 源 帚本 ちかんのりやちかんのりや 枕 八 暮

ちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりや

いかり

上小同ト但下小含めたる意ありりや  
ハ思ひがらんりやちかんのりやちかんのりやちかんのりや

ちかんのり 源 帚本 ちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりや  
ちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりや

ちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりやちかんのりや

いかりまほこ 俗

馬賊を搦破さ製  
たる肉糍とり

いかり 訓引判

巖の義ありやちかんのりやちかんのりやちかんのりや又猛く強  
きとりの 宇 俊 藤 あつら ちかんのりやちかんのりや

ども源葵うつつとも似むたそくつらき  
ひくふる心出く赤かをづるわざど

いかれ 俗 刈刈判

いかれ

宵ともらなき君のあらたな 好忠集 秋風のまじきな  
あれと吾宿のあをらかかせる蛛のりりれど

いかれ ○ざる○せうけ○あたを  
○りどめけ○ほで

いがれ ○まがれ

拾遺秋 千々やぶる神のいがれは雪ふりく空よりかつる  
和瑞籬 俗 豆加波

いがれ まを人よみせん

ねんひん

いがれもの

あらくく猛き人あり 宇俊集 わをくげふ  
いづれものどもひと山まもつめふみゆる

強く猛きあらしあり 源 手習 女鬼やあ  
らんむくつたをたのむらうらあき

鳥けうもの色をもきら  
もぞころりくへ

いかく 音

いがら

いふらうのあまの内かふる刀あをら  
心よこを落ゆら此やまひめのあめらわら

いがら 俗

いかる 刈刈判

あうくま 源 模柱 火とうをとりよせ殿の  
うらよよりくまをけ給ふ

いかる 刈刈判

けうたあうりまく近付く者あうり  
玄光の鷲栖中留り金王の都へ上りけり

いかけ

決かゝるの體言 尊海東の道の記 家のあはじ  
いかけをとりひつ侍ま何となく心の

おくちゅうーらう、おのひきや濁らぬ物を  
我心けうーも何のいひせうと

いかけ俗

銅鐵あどの罫の漏を止るたのゆ金を  
溶し其際ハ沃めらるるとりふ

いかけ俗

魚名あらの  
下小注也

いかけぢりぢり

漆地ハ金銀やどを沃めらるるわうり  
あまーらや風の持るあふあまき庭の

ひまわら花のりけぢり辨内侍日記  
やら貝とまうたる御づ平治物語

沃懸地の金覆輪の鞍

いかぢ俗

同ト

いかさうめん俗

いあまやう同く筒ハ穴を穿ち  
細くつれい如るのをりふ

いかさう俗

如何あるさうの意あり方わらやまを  
とえ何方おもわめせう天離ひをあらあ

源相壺りさうあうとわら又さう  
さあれとさう又さうとせんと思へ

いかさう俗

上の語より轉して人の物語をうけとる  
辭とやうオサマ尤ホド尤モの意あり

いかさう俗

上の俗語再び轉して人を欺きを何サマ尤モ  
と兼引くいむることあり

いかに

嚴字重字茂字あどの意ありさの體  
言ゆらわらうの言なり今大さかんを

イカイ多きこととイカイコトかどいへるも意あり皇極紀重日此云以  
柳之比舒明紀嚴矛此云伊箇之保虛祝詞式春祭王等卿等乎平久天皇

我朝廷伊志夜皮嚴能如又續紀四詔命者受賜止白祭賀  
此重位繼坐事天地心勞美重美畏坐岫多詔命衆聞宣

いかに和泉

草名わづの  
下小注也

いかにシ

嚴の意ありいでる重大あるといふ詞  
かり續紀三重支勞事乎所念坐

いかにサ

自ら物を活いを

いかにセ

他をいてイカサセルを  
いかに

いかにシ

同上

記上乃遣比賣與蛤比賣令作海平治物語三哀尼命を生ましと思  
召さる兵衛佐を助て給へる敷給へる東十以景能助成活命字鏡集療ス

いかた (俗)

いわだ

とらふぞ五日太ふ作う瀝らん  
和桴筏和名以

いがた

いがたう先

かろう中昔より狐をいがたうめといへり又媒のともまれば人を欺くを狐の人をとあるふよまそといへり源東屋心志らひのやうと思われ侍らんも今更ふりがたうめあやといふやういふ人新猿樂記野干坂伊賀専之男祭河海十九伊賀伊勢國あら白狐をたうめ御前ともりの岷江入楚伊勢伊賀の諺中媒の事をたうめといひ伊勢鎮坐記専女三狐神藻十五いがたうめ媒也一説伊賀

いかたごぼう (俗)

いかたごぼう (俗)

牛蒡の新弱根とたうた形を  
後を撐を人をつらう守祭後浅き世ふ歎き  
渡るいかにいふつらのうきり流きぬ

らん新古今

いかにいふ山にあらうと問んまうらう

いかたごぼう

許能等與美岐遠伊  
可多氏未都流

いかたごぼう

年魚を細く切柳葉を筏の如く並べ其上  
小盛たるものをつらう大草相傳聞書いふた  
かきとくしんをうとやう也とくつらうもて庖丁聞書  
いふた鮎をあうらう細作らう柳葉をいふたのうらう  
小作らうたる鮎を  
入らう出まへ

いかたごぼう (俗)

いかたごぼう

介名あのがひの  
大なりりのやう

いかたごぼう

吾景

いか

〇十一

酒小梅諸と堅魚を入もかたらう小杏仁を入もたるもの大草相傳聞書いふたのま  
わの能酒一とら小梅千五つ程入かつとく  
細小けぐら一小入半分小せん  
いかにいふ  
いかにいふ  
雷をいふ記上燭一火入見之時云云於頭

者大雷居於脚者火雷居佛足跡歌伊加豆知のひくりの如きこもこの身と  
去小のおわりまゝ常小たゞしくおのづからさや和雷公豆伊知

いかで

如何してあてドウシテ何トシテあり源源水い  
かゞたかたかうけんと思ふよりたゞるるこあん

枕五枕五のて女官ちとのやうふつれあゝるあらん○ドウシテドウガナシテあり  
後撰後撰離別離別のうゑ猶豈とら山内身をたゞて露々たれたひ小そらんとをねをふ

伊伊むつゝつとたれた人をいゝとて思ひ  
こたうけまが哀とやあひひけん

いかしく

如何ゆゑと思ふゆて物を待たる意な  
り方伊加登伊加等ある吾屋前小百枝

さうおふる  
橋玉小貫橋玉小貫

いかなぐ俗

如何あり如何ありあて  
ドウシテと云小同ト

いかなご俗

魚名形ひくふ似て薄茶色長さ三四寸  
此魚ゆてゆかると醬油を作る讃岐の産

いかなご俗

如何なる事の轉ゆて  
ドウイウモテの意あり

いかなご俗 長門俗 いかなご俗

周防俗 草名てうせんあき  
グワの下小注也

いかに

如何ゆゑ疑ひ問ふことをわたりドウ又ドノ  
ヤウニかり古今春下雪とのとあるだわあを

櫻花のうちちもて風の吹らむ源源相壺のうちちもてきりあるといあり  
べん人だまあきを○又ドウキヤといひかゝる詞也方大海の波のかけにあり  
とも神をいひて舟出せ如何古今雜下都人のうちと問を

いかにせん

催馬樂律の曲名何為伊加尔世牟也  
乎之乃加毛止利

いかにふこと

如何小云ふ事の約なり繼體紀柳羅  
屢你鳴以柯你輔居等所梅豆羅古樹駄樓

いかにうか音

鳥賊の背中の大骨あり○海蝶蛸和鷓鴣  
魚云云今案背大骨即俗所謂甲也

いかにくら音

鳥賊の腹中在るといふの  
墨あり和鳥賊墨和名以如

いかにま音

鳥賊を續く切り醃小  
あつる醃をいふ

いかに音

いかにくら音と  
同ト

いかに音

細き竹串を骨とて紙を  
貼り細き繩を附け風小乗

五景

五

十二

トて空小上る戯具やう字だて、画だて、娘だて、とんびだて等あり

いかにのともひ

古小児誕生の後五十日をけり、又百日も儀式ありて餅を製まるとりぬ

いかむかろ

吹くる方をまづそむくらん

いがひ

介名蚌小似たる蛤類やうて、本狭く未潤く、外面黒色なり

又東海夫人主計式上 贍餼貽貝富那交贍各四十六斤

いかにのまろ

賦役令貽貝貳三斗和貽貝一名黒貝

いかにのす

貽貝、蚌やう、賦役令若輸、雜物者云云貽貝貳三斗

いかに

返天神御子之使 太平 將軍本間が矢をとりの

いかに

魚名、ぶだひの、下小注

いかに

犬やうの噛合やう轉トて、人の物のい争ふより

いかに

犬やうのかまあをいひかり、以字、嗥、童蒙頌韻、菩提心集、犬の子、大

いかにわらわあやと  
唯らふ

いかにめしき シクシキ

威儀とのひく嚴重あるをいふあり ○嚴  
宇藏閣下 かくて年々々々朝日小きんだち御

さうぞくつとめぞうつしておとを奉り小参り給へりいとのめ 源 桐壺  
おたきとりの所小のめうその作法を志すも小 以字 威猛 器量 又  
エラウ大サウニとのふ意小のああり 宇 吹上 馬場殿 大きな山の  
中ふいのめ 死より橋あり 源 明石のめ 雨風のち

いかにもち 俗

餡糕を糯飯中へ入も蒸したるものをいふ  
其飯上面小着て栗毬の如くと云意あり

いかにもの 俗

如何物の畧言偽物  
鹿物等をいふ

いかにのふひ 俗

百物能毒小拘らど安り小食ふ事とらふ  
嗔め 死物らひの義なり

いかにのづるのたち

いかにの製作の劔をいふ 平家 九木曾  
殿其日の装束は赤地の錦の直垂よから

あや威の鎧きてい物  
作りの太刀をとら

いかにやう やう音

いかによ小同ト ドヤウの意なり 源 神  
かやう小おやトたせたまひてかうあり

あやと聞えたるふ 又浮舟 そのかへりぞといのやうやうて出つるが  
枕五 いちやうなるあやあるといひ聞えさせ給ふ

いかにらうせ カシシキ

いかにらうとわなド 續古事談上 御ひだを  
いかにらうとて事の外小御むらりありけ

まが 發心集 四 おひた 手をとら 鼻をふら 意なり  
どひぬ 宇拾十五 目大あて見らるる 鼻をふら 意なり

いかにらき カシキ

愚管抄 隆家の君いかにらやうある人まで

いかにらしき シクシキ

いかにら小同ト意あり  
以字 耐 又 酷 又 烈

いかにらしむ カシシキ

いかにらし小同ト意あり  
以字 耐 又 酷 又 烈

いかにらむ カシシキ

我と目目をいかにらむ又かむらをいかにらむ  
あどをいふなり 宇拾八 あひらうつるいかに

とも目をいかにら  
舌をめづりをして

いかに

船の泊る時海中小降し置く鎮かり古ハ  
石を用いたるを今ハ鐵をいかにらむ

和 碇 伊加利 山家 下 つよくひくつたきとをせよめと河  
そのいかにらむのいかにらむをいかにらむ





鳥名

鳥名 大さ 竹勞の如く 全身灰色ゆゑ 頂深黒色 翅の端黒く 黄褐色を帯ふ 尾茶褐色 脚赤色 背大ゆゑ 短く 深黄色なり ○桑屬 用明紀 斑鳩 此米ニ鳥大集 本和鶴 和名以 加留加 此之ニ樹 斑鳩

いかるご 周防石見 俗

鳥名前條 小注

いかるご

いかるご

聞えまわらばあることありげなること又々 此人より死をのべたこと いくの體言 ○生字 藏閣下 昔より 契一深き 中 意の志氣の勢ゆて 慷慨と云 ○意氣 意氣の義 意氣ある人の 風采 瀟洒 物のかたより出る 風流人なり

いかるご

いかるご 音

いかるご 俗

いかるご 音

運歩 異儀 慶節 異儀

いかるご

ゆれとある 意なり 伊狩 見合 蜻上 心ざける 佛をがせたる 其日

いかるご

いかるご 俗

いかるご 俗 ○ゆれあひまゐる 同母異父の兄 弟と云ふ

いかるご

善提心集 中山のうらふ山 だるものゆれあひまゐる 彼の此と行あふをわらふ 伊狩 落窪 三まゆりのちゆ

いかるご 俗

いかるご

死にたる人の息をいかるご 伊又の日の戌のとれをわらふ 源 又 善川 出たりと

いかるご

往ことのいかるご 姓 古今 離別 人なり 道ならぬいかるご

吾集 卷下 五七



しきまふ

しきまふ

しきまふ

しきまふのふらり

海小なるとくらしふちり 万十六 生死之ニ海をとりこむるなり 潮干の山を志ぬび

しきまふ

海草なり、長さ尺餘、青色なりて甚細く、枝ありて亂髪のごとく、乾けば紫黒、水に洗

しきまふ

ひさらし、白くちりたるを煮く、瓊脂の如く制し、食用ゆき ○仙草  
内膳式 供御月料伊祇須九斤 和 海髪 和名以水須漢語云小髮菜  
源榮ののけ  
生たる人の人小崇るをゆき 源榮ののけ  
の名のりまゝの中 落窪 のりまゝのきまふも出ぬ 手から  
とてそのたき 枕 八名おそり 枕 のくらちり のきまふ 遊仙窟

しきせし

しきせし

しきせし

しきせし

しきせし

息勢張めて骨を折く  
物事をとるゆり  
氣息急きあて氣息と  
切こりてとる  
物事の行立つて事の  
進んで成ゆくと云あり  
寝ぬるここのきまふ義あて  
ゆきまふののけ ゆきまふ

しきせし

しきせし

しきせし

意氣地の音あふべし人と  
競ひあふ事ゆり  
ゆきまふののけ 枕 三五位六位などの  
云云とわく 更科日記

言

いさごもふらうるさくりれちがふ  
馬も車もあら人も

いさごちる 三ノ川

行散るめてあつちもるりの各々さくさく  
小なるとりふなり 源蓬生 さてありぬだれ  
人々のたのびから参りつれとあつちもるりを皆つれとふたれ  
がひらりれちりて 又續 ともな人どもりれちりて

いさつらひ 俗

氣息の遅速をいふ イキツカヒガセハシイ  
イキツカヒガワルイ などりり

いさつら 俗

息と繼意あつち  
休息さつちを云

いさつら 加知知知

行着めてこころざしのとくろりよりつらつら  
たり 源 負みちの空の空のふもねづれあや  
あらんさらふえりきりくすつれ心ちあらんさる 更科日記 あつちつれさつち  
むらりれつきたるわどかれつらさるる紅葉のたぐひなつちさつちさつち

いさつら 俗

行就の意あつち轉して事の終るをいふ  
身上がイキツク命がイキツク ちりて云類あり

いさつら 加知知知

長く大息を衝く 記中 美松押理能  
迦豆伎伊岐豆岐志那陀由布佐那美達  
衰 又 五かくのさ伊吉豆伎 又 畫ちも歎くひくら 夜も息豆伎あつち 太平 十六 てつちさつちのいさご

いさつら 以字 响ツキ

いさつら マシメ

息の腹ふさつちをいふ 著 十六 いさつら  
くひらまんを期ひひらせ給へらつちわく

いさつら 俗

行つちる義事物の  
狭きをいふあり

いさつら 俗

椀を肩に掛たる人の肩を  
息め支る具なり

いさつら

行く所をいふ 狭 せれ  
いさつら

いさつら 古 今序

此世の生活であるのまてをいふ 助  
辭なり 古 今序 いさつら

歌をよま  
さつち

いさつら

いさつら 經 寒暑既為成人更無 無  
いさつら 應 神紀 長 者多

いさつら

心の不平あるなり 垂 仁紀 日 夜 懷 悵 無 所  
訴言 万 九 伊 伎 騰 保 流 いさつら

いさつら

のべらきびあがら **字** 慎伊支度 ○又憤懣の意めく怒るをりふ **今物語**  
蓮華王院の寶藏納りけるをろがとろりゆこそおくべらきとくろりき  
とやう申ける  
とちん

シキヤウロシレ **シクシシキ** 心の不平めて憂ふるさかきを云あり **神功紀**  
梅珥志彌曳泥磨異釈迺倍呂之茂  
生止るめて此世ふのろり居るをりふ **源タ貞**  
かくりふが身をそりたるとするやれこそら

シキヤウロ **リリル** 生れこの給ふ **又** 開屋 うきまきせある身をかくりたるとする  
**又** 手習り うきまきする人の命なまむ

シキヤウロシレ **シクシシキ** 行成の義めく唐突お言ひ又 **ツカケ** 事と為るをりふあり  
**字** 慎伊支度  
其儘お放棄とらふ  
寫真の水偶  
とらふ

シキヤウロシレ **シクシシキ** 物りふ聲のかきあるをりふ **竹御** 物り  
おわらうととらふ

シキヤウロシレ **シクシシキ** 息の緒めて命をりふ **方四** かわくふたえね  
とらふ **又** 氣緒お思へるをりふ **永久百首**  
かたなかむせとらふ **又** 永久百首

シキヤウロシレ **シクシシキ** 罪の一種なり生る人の膚を傷るをりふ  
**祝詞式** 大坂國津罪ハ生膚斷死膚斷  
イキチお同く思ひこむる  
事を立ち通まをりふ  
上お同くお同く **臆ツク** **カツク**  
息を腹中おもちをりふ  
のたむとらふお同く  
穢物お行合ひ觸たるめて今りふ **踏合** **ケガレ**  
たうりたふ色のけがれとらふ **略**

**源** 源木 くのちある聲きくをりふのひよまきとらふの **狭** **上** 又人たぐへよを侍  
くちのちある **狭** **上** 又人たぐへよを侍  
の **一** **た** **あ** **ら**

シキヤウロシレ **シクシシキ** 息の緒めて命をりふ **方四** かわくふたえね  
とらふ **又** 氣緒お思へるをりふ **永久百首**  
かたなかむせとらふ **又** 永久百首

シキヤウロシレ **シクシシキ** 罪の一種なり生る人の膚を傷るをりふ  
**祝詞式** 大坂國津罪ハ生膚斷死膚斷  
イキチお同く思ひこむる  
事を立ち通まをりふ  
上お同くお同く **臆ツク** **カツク**  
息を腹中おもちをりふ  
のたむとらふお同く  
穢物お行合ひ觸たるめて今りふ **踏合** **ケガレ**  
たうりたふ色のけがれとらふ **略**

シキヤウロシレ **シクシシキ** 罪の一種なり生る人の膚を傷るをりふ  
**祝詞式** 大坂國津罪ハ生膚斷死膚斷  
イキチお同く思ひこむる  
事を立ち通まをりふ  
上お同くお同く **臆ツク** **カツク**  
息を腹中おもちをりふ  
のたむとらふお同く  
穢物お行合ひ觸たるめて今りふ **踏合** **ケガレ**  
たうりたふ色のけがれとらふ **略**

シキヤウロシレ **シクシシキ** 罪の一種なり生る人の膚を傷るをりふ  
**祝詞式** 大坂國津罪ハ生膚斷死膚斷  
イキチお同く思ひこむる  
事を立ち通まをりふ  
上お同くお同く **臆ツク** **カツク**  
息を腹中おもちをりふ  
のたむとらふお同く  
穢物お行合ひ觸たるめて今りふ **踏合** **ケガレ**  
たうりたふ色のけがれとらふ **略**

シキヤウロシレ **シクシシキ** 罪の一種なり生る人の膚を傷るをりふ  
**祝詞式** 大坂國津罪ハ生膚斷死膚斷  
イキチお同く思ひこむる  
事を立ち通まをりふ  
上お同くお同く **臆ツク** **カツク**  
息を腹中おもちをりふ  
のたむとらふお同く  
穢物お行合ひ觸たるめて今りふ **踏合** **ケガレ**  
たうりたふ色のけがれとらふ **略**

詞なり源々貝 けりやうのりたあまふ  
からせたるまふぞや

いさむとけ

増譽といふ此二人各たふとてりた佛なり  
宇拾五御室戸を隆明とりの一乗寺を  
源んころふのひ出給ひける事なき忍びたすひけりなん

いさむひ

いひなかりけまのむむるりたひひ  
神代紀下 徳伊人の子をまばだころりた  
源相盛 右のおとの御りたひひ  
物あもあらざ 又梅枝 水のりたひひめたるふかたな

いさむふ

勢の用言なり 宇祭の使 御かひのめたるふ  
りたひひ七のたうらとやむむかひのこ  
ねま ちまのめ 又藤原君 民部卿のわたり 腹の六の君年十八こふたり  
またうと給むとさるといとおろりたひひたり 又田鶴村鳥 あるが中ふりた

いさむく

息ま ぬて怒る時息のあらりたるをり  
なり 徒然草 上人猶りたまきと何とらふぞ  
非修非學の男 又轉してイキホヒハル 意ふ云なり 源若菜下 故院の  
御時小大后のはうのともめの女御あつりたまき給ひか

いさむたふ

行いせらる事とりく 二水記 永正十四年 親王御方其外御所方御生見玉の  
沙汰あり 嵯川親元記 文明十年 御成 御時 御方御所へ御りき玉 親俊記 天文八年 癸  
卯若公様御 生見玉

いさむ

息を腹中小とると  
ゆふなり

いさむん

常の鳥わたりたる鳥又此國小あらたし  
て他より渡りたる鳥をいふ 以字 異禽也

いさむん

草名 さいるとりのむららの  
下小注也

いさむぐらふ

世小ながらて人よめらうあふ又時よめらう  
あふを云なり 大和 死をんをさあくと  
あふ給ふるをまたなんあや 死ころりたのふらひ侍る 源紅梅 けらわね  
人のりたのむらあわがらげの命をがさならか

いさむう

世の常なるぬ香を  
いふ 慶節 異香

いさむう

かりりたるかさうとりの  
運歩 異形 慶節 異形

意氣の盛なる状を  
りふ ○ 意氣場々

しきりやう (音)

あゝを聞え  
ゆる

しきる (音)

しきも (俗)

常陸水戸 (俗)

しきも (俗)

しきり (音)

しきり (音)

しきり (音)

氣候の熱き又身體の熱くあるをりふ  
遊仙窟 眼華耳軟以字 執

しきり (音) 下小注を 弄花抄 けきをたや  
生靈也 盛衰 九 生靈死靈輕かるをわらう

しきり (音) 體言  
虫名、かつのせとの  
下小注を  
鬱蒸の氣ゆてあつきをわらう  
しきり (音) 意あやう

しきり (音) 行別あつて死別不  
對してりあやう

しきり (音) 萬端小備う通  
まをりふ

しきり (音) 行て其ところ小居るをりあやう 枕 十二  
條の宮ゆであやう ままむしてそころ小みま

しきり (音) 息休め小用ぬる食物わらう 宇 藤原 右のわと  
まをりふ

しきり (音) 行あつて此よりわらう  
小をりふ

しきり (音)

しきり (音) 行てあやう  
りあやう

しきり (音)

しきり (音)

しきり (音)

万 十七 ころせむ玉あもかもあておまねく 見つゆかむをおきて 伊加婆乎  
恩 枕 十二 ありを里へいかんとりひて 奥儀抄 昔帝のま名をりける人あやうの

のふあやうてあなうふ  
まどひゆけうけるが

しきり (音)

しきり (音)

万 四 戀 かなむのちの何せむ 生 日のためをりまをりわらうまをり  
ちでう 將 生 りのちをりあやうわらうひつあはらまをりあやう  
拾遺 意 四 何

吾景卷六

言

せひ命をかろくちかひむむのをとわのふもあけけ  
字拾三 おのれ就んあのうもうのう物を以字生イキ

い

續千雅上が身世小あり行年と重来て幾春きつうぐひまの聲新古秋上た  
なぐたのとるとる舟のかちのもふい秋かきり露の玉章

い

い

物事の成をりふ不成をが  
りかぬといふ  
日數のさたるをらぬゆのふ万八秋立て幾日  
もあらゆが此ねぬる朝けの風袂まむも  
枕五りかるりりこのらせたふふきをと問ふ  
生薬めて死をぬ薬をりふ拾遺別かの山小  
生るるのとありけまむとむかるもたれ

い

いれかるを壬二中君がため蓬う嶋もうるぬぐ  
いく薬とる住吉のら

い

い

りかるをむぬゆのうちにぬれくことかり  
神武紀天皇街之常懐憤對  
兵卒をりふなり神武紀勁軍万三東の  
國の御軍士とりたつひて又かるるる

たたれ軍卒とゆぎたまひ宇藤原君天下のりらぬりぬるるともらちか  
ちなんや○又轉とて合戦まることありり保元物語中今日の軍のすの  
さらやとこのとるたり又のちありてるるとる  
をも剛臆をもありととさめ

い

合戦の勝利を祈らん為小祭る神をりふ  
保元物語中さらが軍がとらすつりまてととと  
太平六合戦とと始もの軍神小祭りて人小見こるとせよとと六條河原に  
引出一人のとさめて首をゆりかけらるとり

い

い

出陣またとりぬ太平九上將のとらのとぬふ  
りらだらり以守師師の字鏡集師師の  
りらびとを督卒ある頭のひとをりふ  
神功紀因以為將軍念興東國兵雄略紀伏請二

救於日本行  
軍元師

い

い

い

軍旅小用ある舟かり  
和艦艘漢多云以不戰船也  
軍小出る徒人をりふ○軍卒崇神紀即渡三  
於大坂皆大破之殺吾田媛悉斬其軍卒一  
北斗をりふ兵學家小北斗を軍神とと故  
小此名あり倭玉嶺魁がシサ

吾兼泰六







ゆふくわしゅけの哉拾遺意二  
あひとくらのゆひきくゆもあらねども年月の  
ごとくもやゆらわを壬二エ  
夕たぐもる猶たのむを忘らさくゆひきくゆも  
あきらぬら  
まこと

ひのたるひ  
生日の足日あく命長く出る意足のあぬ  
ことなく方足意なり祝詞式神賀今日能生  
日能足日か

いくふ 川口  
矢をいづく意なりさきと射るいふこと  
ゆも用わるなり仁徳紀是日集群臣及百

寮令射高麗所獻之鐵盾的  
孝徳紀射於  
朝廷天武紀下射于西門

いくし  
千載離別  
さうがから人のこころを  
いづくのうらのよまゆめりくわらん  
幾重かり拾遺意四

いくやど  
す玉葉雜二  
ころの花をまひるまの心あ  
いづくもあひるまの心あ  
いづくもあひるまの心あ

いくむ  
記下伊久美陀氣伊久美波泥受多斯美陀  
氣多斯尔波韋泥受○り入の略くといふ  
りりの約めあ竹の葉の繁きりのなまば入隠作といふなり  
つひたる意へ入籠寝さぬといふ  
夫婦與寝せぬといふ  
入籠るといふなり

いくむ  
記下伊久美波泥受  
互ゆ矢を射めらむをいふなり今昔各  
楯を寄て今射組なりとよるやどゆ又

いくむ  
軍を不令  
射組

いくめ  
幾目ゆくとかりの目なり順集露をいふと  
たぬぬをかりの青柳いづくめかひらるま

いん  
がほする  
らん

いん  
幾代なり古今雜上  
はものえのまの姫松いづくらん新古賀

いん  
年へうちの橋守くもせん  
いん  
いん  
いん



いけうを俗

槽中小畜おく食用の魚を云なり

いけがれ俗

根のある草木をう名ことばたも垣をりふなり

いけごひ

蓄置く用を待て割烹する鯉をり新六三水ふゆは浮くひきふるゆをひのりもち待

やもせり  
ちのせや

いけま

魚を水中小畜以置とくつをり和蘇伊羅池水中編竹籬養魚也

いけごま俗

櫟の炭めて灰み埋め置池田より焼出せ火を久しく保つ炭なり

いけごま俗

櫟の炭をり

いけづら俗

鯉鮒等活動するりのを細切しせき食用ゆまる制作をいふ

いけごり

りごりの體言生ながら捕ふるなり又りけりたる人もいふ万十六から國の虎とりふ

かをを生取まやうらうのちきまのかりをたきま 著一隆覺方軍兵多 く命を失ひけり二十よ人のいごりゆせらるふけり 平家十二平氏のりごり

いけの鳥羽小著

いけごり

生ながらからりたるをりふなり 保元物語下 爲朝むどのりのが普通の丸夫ふりけり

事よ盛衰夜うらちをそんどのりけり うへの申請ごりのちふあち

いけのい俗

吉からせ又能せをり

いけふ

生贄ゆ大神宮儀式帳 從志摩國神戸百姓進上于生

贄及度會郡進上贄和儀牲

いけふ

天つ罪ふ八種の罪の一種なり 獸なり記上 更取國之生かから皮ををりふ

大奴佐而種々 求生利 逆利 尿戸 七十二番職人歌 いけふの皮かろうとれわが

むもかあうとあうゆも まめる月か

いけごり

りごりとげを云あり 狭 親の焼ひ給ふより此人をのりて見ゆり

いけむね

らさびん云云花ハリけ  
そむらりらりら

立花より出く花を瓶中に挿事を學ぶ伎  
をりふ瓶水ゆく生し置義あり仙傳抄つり

いけぶら

鷹の餌袋をりふ但し生たぐを入る袋ゆて常  
の餌袋と異なり古節生袋鷹具  
食料の魚を  
養ふ槽なり

いけふね

いけよ

蔓草なり春宿根より蔓を生じ緑ゆり  
紫を帯ぶ葉兩對して何首烏に似たり六  
月葉間細莖を出し五辨の小白花攢り開く花後莢を結ぶ莢中紫あり  
今馬醫専ら之を用ゆるなり○牛皮消

いけみづ

いけみづの

水の槪とみづを枕詞なり和名抄淮南子云  
决塘發槪此許慎曰槪所以通波實也

蓮の異名莫傳抄池見草なり花影移る花  
や曇らん池見草波ふかしく青葉浮ひつ  
後撰意池水のりひ出るまよのかさくも  
みづのりかめくどをへまろる○今按池

いけん

意ふ所見る所の事がらを述ると云公式令  
凡有實陳意見後封進者即任封上義解謂

意者心所見也  
見者目所見也

いけん

封事などの意見より出く諫禁む  
るをいふ異見の字を用ゆる

いけり

魚鳥等の軒をいふ庖丁圖書いけ盛といふ  
ハ鴻鵠鷹などの躬を細くそ記細作ゆて

いけり酒  
出まなり

いけるかひ

生くるるほどの身の幸ひをいふ貫之集明  
たぐはあつまはひものいともさそたえくあひ  
人数小あつまある

いけるかひ

生る浄土あり誠の佛の生くる在る浄土を  
いふ源蓬生りわこうりける浄土のかざ

いけるかひ

いける

と利心利心利あぶのどあく生る利心るな  
く心の空たをいふ万三義道を引く山小  
妹を置きく山ぢをゆたが生跡もなり又あまきうるひかの  
あつ野小君を置くおひつあまき生かむなり

いびるやとけ

生佛ナマノブツ不同ナラズ源源手手習習うねりもあつる哉と  
是のまどりたる佛いあやうあうく覺え給る  
源初音春のあまのあま取分る梅の香もまことの内の  
句ひよあはれまうひくひたる佛の御國とあやゆ

いこ音

こまやうのち  
あう○以後

いこ西京俗

飯櫃イハコやうひひつうの  
下ふ注ま

いこ筑前俗

魚名ひひぎりの  
下ふ注ま

いこう俗

已講イコウあま僧の職名なり拾芥抄中已講内供  
阿闍梨謂之有職大鏡三會の講師

まが己講と  
名づけり

いごき俗

イゴクイゴクの體言あまイゴキカナイ  
イゴキガトレスあまの有餘あまを云

いこく音

此國の外の國を  
いふ○異國

いごく俗

うごくと同ト  
動

いごく音あじらあひと

日本の外の國の人と  
いふ○異國人

いこ州いれ

根イコがら堀とをいふなり万八去年の春  
伊許自てうる吾やどのとたのうのは

花咲ハナお

いごハヒカ

のいごといふ意の古言なり記中疊カ音  
志夜胡志夜此者伊基能布曾○古事記傳

伊賀と云く人を賤しめ詈るを伊基能布と云  
しゆ伊能布いつくのふとらふ類の能布なり

いごハヒカ

息をつれくやまむをいふなり万かもの  
ひごりさゆる息ことなくかひひつ

寛平御時后宮歌合夏草も夜のお露中いご常あこがら  
我どかやい字貼想カ

いごハヒカ

息いごあまのいごといふと意ねるト仁徳紀  
自今之後至于三載悉除課役息百姓之苦

今昔サハ然もい國の政をも息く物をもよく納させ  
給ひく御思の如くあま上らせ給へど

いごハヒカ

箭イゴを射入るをいふ

いこころる カレカレ

いけ齋ふゆと體をさすめくこのつらぬるを  
りふ以字齋籠又齋ニハコ

いこよめか

たけ高きまきまをのふ垂仁紀生於  
瑞籬官生而有岐嶷之姿

いころもせ カシシセ

矢あく射てころもせをのふたり 神代紀下  
聲惡鳥在此樹上可射之 綏靖紀 欲以射之

手研耳命竹露もふとそらゆかたり  
平家攝本 矢ごらゆかむるのいころもせとりのふ

いせ

不知といふ意の詞イセ又下ウチヤヤラと  
云中同ト万士いぬくもの鳥籠の山なるいさ

や川不知二五寸許瀬にがわのらとと古今春上  
人のいさ心もあらむ故郷の花

あらざとをりとも落窪 何の名ぞ落らざといと  
いせ女ニハコ いせ女ニハコ

いせ

いせ女ニハコ のいさゆき サアといふわわの  
記中伊香合刀履中紀去來此云伊井万

去來こどももよも日本へ大伴の御津の濱松待こひぬらむ  
古今雜上 鏡山のいせ立よりと見てゆるむ年へぬる身の老や志ぬらと

いせり 俗

草名むの  
下中注也

いさがゆ 俗

蟹類あつらゆの  
下中注也

いさがのゆり

率川社の祭を云三枝祭ともいふ二月十二  
月上酉日わり令ゆら孟夏の條ゆのせたり

神祇令 三枝祭 謂率川社祭也以三枝葉  
飾酒奠祭故曰三枝也

いさかひ

いさかひの體言諺あをりふ 祭 後梅大將 ことき  
んだらあをびりさうひをどせさせたりゆ

又ホの聲 かつぐ小さうのあらさういさかひをのせ  
落窪三下 いさかひいさかひ

いさかひとせのちぎり

の遅く出来てその時の用をなきぬを云  
喧嘩スギテ棒チキリ とのやもつり 平家十二六

日のまやうぶあふあぬ花いさかひとせの  
ちぎりまき哉とを思てせける

いさかふ ハレカレ

いのこををあらとををりゆわたり 源 東屋  
殿ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

げわくくらのめ 死事もなくわくくらのめ  
明らか 愚管抄 いさかひ論せらるる

いさね 俗 おくせ

魚名狀鱈魚似く色灰黒赤褐を帯び  
脇上一條の黄線あり夏秋尤多し



いさねがし(俗)

魚名、わくらうがし(俗)の下注

いさねよきカシカ

孝徳紀其郡司並取國造性識清廉堪時務者為大領少領金

葉雜下いさねよき雲のけしをたのむ哉イサネヨキ平他字類抄イサネヨキ

いさぶらケケケケケ

下のかへ矢をひくるとりふ又的より下へ矢を射まげよつまへ

又笠懸りの時的小へ

いさごオサゴ

砂なり神功紀多摩岐波屢于池能阿層鐵波羅濃知波異佐誤阿例椰伊裝阿波那和

例波和砂水中細礫也和名以左古

いさごオサゴ

雜りたる小魚をいふ吳竹いさご

いさごイサゴ

ちひさけ魚の子也雜候なり新六波風の荒き濱へのいさごちひさけ重移るる物の悲しき

いさごイサゴ

虫名、流水中お生ト、小砂石を綴り負く石小附く虫の長さ

四五分、蚕の如く淡黄なり、後羽化し去る○石蚕

いさごイサゴ。とろめん。あらせ。あらせたるう

魚名、攝津兵庫及び駿河等小産は、長さ一寸許白色

いと微黒、目睛黒、體粘滑ゆして泥鰌の如く、わけて鰓も腮小作る者

鏡小鰓イサゴとあらん此のいさごなるべし

いさご(俗)○さのぢり

魚名、近江和介あぐ取る淡水の産なり、長さ一寸許、頭圓ゆして蝦虎魚小似たり

いさご(俗)○うらうら

魚名、越前足羽川の産、六月炎暑の節捕る、形蝦虎魚小似て一寸許、土人取て鄭小作

いさごイサゴ 出雲(俗)

魚名、志保の下の注○麴條魚

いさごイサゴ 細小の義、かゝり形状をいふ辭、小あり

王佐そのよいさご物小かたつく源々良

御心小たがとと思ふ小又夕霧たがのいさごかのひまをだうとつとつと聞え給こと

いさげけれ カシキ

幸焉雄略紀 於是百濟王聞日本諸將縁神武紀 親率輕兵巡

事有續紀古小事  
波今帝行給部

いさげけり

少なる日さたり 王佐四日風あつたえ出た  
たをまさしく酒もれ物奉せりかろやう小

物もてらる人小猶もあつたけりさげせせせ  
物もたゆれもまれやうやもてまつる心ちり

いさげこ

魚名、いさげの下小  
注を字鮒伊佐

いさげなび

謝ひ起るを云記中 那加都延能本都毛理阿  
迦良表登賣表伊耶佐々婆余良斯那

いさげざり (俗)

越前足羽川の産、いさげを  
鮒小作する者をいさ

いさげせなま

いさげなま小同ト 宇嵯峨院 いさげ給へてあて  
いさげ 宇拾六 此女どもさういさげせなまへと

いさげく前小立  
いさげひれをゆ

いさげびと 出雲(俗)

魚名、いさげうまの下小  
注を〇麴條魚

いさげめ

古今物名 いさげの小時まつまを日へのぬる心なせをいさげなまへと  
さめ小吹風ゆやなびくいさげ野分まて君あやのあらぬ 大和 いさ

いさげなま

いさげなま

濱松 いさげなまようちまきこもあまのあらまのいさげも姫君あてを  
いさげなまをいさげの給へていさげなまをいさげなまをいさげなまを

いさげせ

昔の語、いさげせといさげなまをいさげなまをいさげなまを  
事伊佐西此 伊射奈依 而伊佐西此 事者許伊佐の伊今水 而伊佐の伊今水 万十四 あまをいさ

いさげなま

いさげなま 我と共に行給への意あり 宇後蓋 母の  
御りいさげ行いさげやう外いさげ給へまらな

いさげなま 内へあて  
いさげ

いさげなま

いさげ

しきく 刊加加加

雄略紀 仰天歎歎啼泣傷哀 仁德紀 爰強頸泣悲泣水而死 垂仁紀 田道間守於是泣悲歎之曰 〇古事記 小哭伊佐知流とある 語格たぐやう

しきと

く郭公かやよ 〇なまあるの誤あるべし

しきとれ

又浮舟 枕六 しのぎとれよぬの僧

しきと

しきとらう 枕詞

又六 鯨魚取まをきまを又十 伊佐魚取ひらきまを 〇のまは一方葉の字面の如く勇魚わく鯨をわめくのま奈の魚の食料ゆつれくる

をりの稱をり 諸の魚獵の中や 鯨の最上の物あるから海の枕詞とまをりともしり 轉と濱とも難ともつけ 又淡海の中冠らせり 猶下のりま

くまのの條 見合まをり

しきとら

他をひらつらまをり又

しきとら

續紀十七 衆人伊謝 率 仕奉心波 又十六 人伊佐 奈方 禮須人 止毛 奈方 又十八 ころあわ 〇のり人を伊射 奈比多麻比 古今 〇のり

ての來ぬりののまをり

しきとのまをり

しきは 〇のり

條の詳お

せり

足摩して泣まありとつり 記上 不知所 命之國而八拳須至于心前啼伊佐知伎

次條のしきとれの體言あり 夫ハよまはがらゆぐらきたぬ聲まあり さもしきとを

寢聰ゆく目の覺る事の疾きをらん 源泰範花

魚名くららの 下注せ

元恭紀 異舎難等利宇彌能波摩毛能 方ニ 鯨魚取淡海のうまを 又三 勇魚取らまを

他をひらつらまをり又

他小まをり

我々のつらまをり

あめのぬまをり 下注せ

草木の葉白き處あるをり 或は黄なるをり 〇のり 覆輪中あき 砂子等多種あり 各

磯邊の義申して醜魚

なると商ふ人をいふ

叱るをいふあり

以字叱 又哥 慶節 評

仁徳紀 百衝 輕捷 猛幹 宇 俊彦 と かげり

又世の中 小ま いらひ 侍も

何の 侍らぬ

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

磯邊の義申して醜魚

なると商ふ人をいふ

叱るをいふあり

以字叱 又哥 慶節 評

仁徳紀 百衝 輕捷 猛幹 宇 俊彦 と かげり

又世の中 小ま いらひ 侍も

何の 侍らぬ

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

磯邊の義申して醜魚

なると商ふ人をいふ

叱るをいふあり

以字叱 又哥 慶節 評

仁徳紀 百衝 輕捷 猛幹 宇 俊彦 と かげり

又世の中 小ま いらひ 侍も

何の 侍らぬ

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

又 嶽院 此事 ゆるぎ 山林 小ま いらひ 侍も

秋近くありるくもむが虫の移りしむむ

聲々ありるくもむが虫の移りしむむ

以字 勇

禁をりあり

万九 このやちとろく神の

伊戀 来てる

新六 たら

六帖 ありまぢのりさめの里

漢土 諫鼓の故事より出たる名あり

院御集 音たえ

万五 あを移ろみれ

を引雲の伊佐 欲比 ありのをと思ふとりの

。廿五

この頃伊君やらんこまやわんのりさよひゆ  
真木の板戸もさくぞ縁おたり

りさよひ

十六日をりさよひの  
月の下ふ詳ゆせり

りさよひざくら

俗

櫻一種正月十六日頃開く  
さくらあり伊豫道後の産

りさよひのぞる

和川

猶豫してのちをりさよひ  
新六二雲きさうの  
たあひれ消る秋風ゆりさよひのりさよひの月

りさよひざくら

俗。さんせうざくら

蕃薇の類其葉細小ありて山椒葉に似たり  
夏月花開く大さ三寸許千辨ありて必一畝

あり其色淡紅又白色あり  
駿河甲斐の産也

りさよひのつき

毎月十六日の月をりさよひ十五日のやう小まや  
く月のがらを山の端ゆりさよひのつきよき出まき

ちうりさよひのたよみ休らふらうらあり  
よみの月をりさよひのつきよきなり  
千載 雑上

八雲御抄のりさよひの月十六日月也  
云云但故人説皆十六日也

りさよひ

ハヒフヘ

りさよひのつき  
意あり又ありふさぎありゆりさよひの  
記中 宇美賀波伊佐用布 万三の

あの八十ちかとのあどらきふ不知代経浪のゆきあらきも又こもつて  
のまのせのやまのやまはまゆ伊佐夜歴雲のゆきあかもあつて又六山のよみ  
不知世経月を出んると我まの  
君が夜へあつてつ

りさよひ

霧を波ふさあまありりさよひの少の意あり  
りさよひのつきあり

らちちと保安二年關自家歌合のりさよひの月影  
らららと高砂の尾上の空ふさあまの月影

りさよひ

小水あり安閑紀此田者天旱難澁水潦易  
浸皇極紀是日雨下潦水溢庭

りさよひ

水のりさよひある井あり源藤のりさよひ  
あれ人  
へかげだよるりさよひのつきありて心をやめる

りさよひ  
の水

りさよひ

磯のあつてをあつて魚を取あり万三白  
標の藤江の浦に伊射利為流あまら見

らん旅行  
りさよひ

りさよひ

切知如知

魚介をとる業をりさよひあり万三あら  
たへの藤江の浦に伊射利為流あまらみ



いー

音 さいま

寸長一尺五寸  
廣一尺三寸

和本朝式云紫宸殿設黒柳倚子源柳並おもひつら

いー

音

醫師あり病と治め療を人をつか職負令  
醫師十人掌療諸疾病及診候

いーあませ

石あませりの石あませりふ事せせ給ひらふひされ草子の石あませりの石の大きさを作らう十の石ひひつづかれ侍りける

いーあまめ

せれちやう  
糸がらう

草名種類多し葉細く葉の中厚く両邊薄  
春末莖を抽き穂を生じ穂長一二寸形  
つららの如く細く緑色なり大あま八九寸小あま三四寸小盈さうも  
あり根小節多し薬用とせ異本大同類聚方殘篇石莖伊勢可

いー

いーのいーを重糸りするめくケナケナと療候  
る詞あり盛衰七歌の音のよさよりいーと

嘆らま  
たう

いー

音

きーんーゆと園大曆節會出仕いーゆ計會仕候て  
椿葉記いー御使も群參まれば

いー

俗

いー

さうま  
さうま

いー

俗

いー

盛衰廿まれば真盛錦の直垂小石打の征矢御免を  
蒙り候りん庭訓往來藤胡籙石打征矢

いー

いーの征矢を盛たる籙あり盛衰廿五義  
仲赤地錦の籙直垂小紅の衣重糸く石打

の胡籙小紫威の  
籙を着る

いー

伊賀俗

伊賀古山村ゆく石炭を  
區別せし其一種の名

いーらら (いーらら)

とい石トのちくく吾やとわ  
とてろをわく

いーかき

き上る事日々増  
月小累りけり

いーがけ (俗)

石を疊とあげ  
たるといふ

いーかけまがり (俗)

文脈六角ゆへ石を疊とた  
如き瀬瀬をりふ

いーかきごひ (俗)

介名みどがひの  
下注

いーかひ

箇指輔智万ニたふあまあひもか  
雲立たれまをん

いーかひ

催馬樂石川伊之加  
波乃古末宇止介

石を以て占むるをいふ  
の類なり 万三杖策もつうぎもゆたくと夕け

石を積あぐる垣なり 信長記四月朔日  
より本丸石垣の石を引せらるる大石をひ

いーがひ (俗)

介名、まどがひの  
下注

いーがと (俗)

日癸巳石見國上言石神二自出雲來是日授從五位下  
をいふ石神のいもかき小まがとをいふ海のこころにぬるかみ

いーかめ (俗)

江河池澤等小産を尋常の亀の中身  
楕圓の堅き殻ありて背稍高く腹扁其

いーがまひ (俗)

殼間より頭尾及四足を出た大あつち長七八寸あり  
此子の大き寸許のものをせしがめといふ 水龜

いーき (俗)

比目魚の一種上面の黒皮小扁ある小石  
の如きもの並ひ著くものあり

いーかち (俗)

辨内侍日記上 ちうのいーのものかまよまきやど左衛門の督を  
よし 今昔九 あわつつけもいーかうける物の上手かあ  
仕つるもの哉平治物語 汝いーも参りたり 宇次中  
いーのづら 永正五年正月二日狂歌合判詞花びらもちのいーけある



しぎま (俗)

舶來する細長ある石ゆして形水賊の如く  
白色ゆして軽く内空くく菊花紋あり  
長一二寸末尖きう漢名鶯管石といふ鐘乳の  
中空ある者と同名あり ○鶯管石

しぎま (俗)

海中の石上小生むる石芝の類ありて  
形菊花に似たりを以て名づく  
石を以て諸物を刻む工あり 三十二番勸進聖  
職入歌合あられたるを作るくも石切の光りを

やがく放つ  
御佛

しぎまの (俗) ○しぎま

水圓く末尖りたる鑿あり石を雕又切る小  
用あるあり 和漢三才圖繪 斬金以木  
草名せんざんざんの  
下小注を

しぎま (俗)

鳥名ありくまぶりの  
下小注を古節 鶴

しぎま (俗)

大石を運ぶ車あり高さ尺小盈たむ  
其輪小く四輪を著く  
ちやまんと  
り

しぎま (俗) 肥前東奥 (俗)

しぎま (俗)

石を刻たる  
彫をり

しぎま (俗)

小石あり人を生あぐら埋る刑あり  
中古邊土あり往々あり事あり  
虫名くもの  
下小注を

しぎま (俗) 薩摩 (俗)

しぎま (俗)

同ト

しぎま (俗)

石坂ありしぎまの  
下小注を

しぎま (俗) 駿河 (俗)

しぎま (俗)

石の硯あり 龜山殿七百首水ぎまのたうと  
くても石硯かた契のまてぞかあり

しぎま (俗) 筑前 (俗)

しぎま (俗)

石炭の一名からむ  
しぎまの下小注を

しぎま (俗)

古人の筆蹟を刻し紙を置る黒質  
白字小撮出したるをり  
柱の下の石あり 和柱礎 和名都美以之 夫 夫  
を咲ありの都のありてり 名のみぞ

かごごありける  
類名 礎 イシノ ツイシ

しーたき 俗

鳥名ゆらちをぶりの  
下小注と

しーだき 俗

高き處のゆる道石を疊たるあり ○礎  
續古神祇 三熊野の神くら山の石だきこのゆり

しーだき 俗

佛堂あり漢風小作もる小地上ゆがある石を  
並べ敷たるをゆり 嚴島行幸記 庭ゆりこのき

しーだき 俗

懸より出る方形を並べたる紋理をゆり左右  
一つを隔る方を互小犬互たる形なり 三條家

しーだき 俗

圓螺類ゆく大さ寸小充たる黒文ゆりだ  
この如し又赤文ある者あり

しーだひ 俗

魚名たひのむらげん  
むらちの下小注と

しーだひ 俗

魚名形らるるゆり小似る肥大口潤く鱗青黒  
背より腹小達りて豎小黒色の大道數條

しーたぶや

急ぎ飛やゆり意の古言あり 記上 伊那多  
布夜阿麻波勢豆加比

しーだん 俗

石段をゆりたき  
の下小注と

しーつ 音

異ある疾とゆり  
古画目録 異疾草子

しーづき 音

劍の尾小着るにゆり 著 延喜の野  
行幸小御劍の石付おとせ給ひたるゆり

云云御犬らるる人の石付とゆり  
参りたりける 字 鏢 妬豆

しーづき

槍長刀あたる下小着る金具を云 太平 天保廿五  
唐綾威の鎧小太刀帯る鐙小金を入たる

しーづき 俗

竹の根土の中めて腐たる  
者をゆり ○鬼齒

ゆづり 筑後(俗)

木名、ゆづりの  
下小詳みせり

ゆづり

石を制作するをゆづり姓氏録石作連云云作  
石棺獻之仍賜姓石作連公也

ゆづり

石を傳ひて行くをゆづり新六三片山のゆづり  
小河のゆづり傳ひ心細くて世を過ららん

ゆづり

石槌あり石ゆづり作まる刀をゆづり記中美都  
美都斯久米能古賀久夫都都伊伊斯都都

伊母知神武紀赤都赤都志俱梅能固  
邏餓勾驚都都伊異志都都伊毛智

ゆづり(俗)

石を以て刻て庭前の點綴小用ひて夜間  
燈火を點せりゆづりあり

ゆづり

冠の堅き難をゆづり辨内侍日記萬里の小路  
大納言のゆづりせらるるゆづりありゆづりゆづり

ゆづりあるゆづりゆづりゆづり  
ゆづりたまるゆづり

ゆづり(俗)

石首魚の類ゆづり至大五六尺小至る  
味美あらざ小毒あり

ゆづり

石を撒其一を擲く未だ下ざる先小下の  
石を取攪ひ合はる戲なり夫石なるゆづり

玉の落くる程あはれお過る月日のかさうゆづり

異制庭訓然則振藪石子礫打

ゆづり

讃岐(俗) 圓塊を成たる石ゆづり大  
さ一二寸殼の厚一二分甚

硬く黄黒褐色ありと裏空ゆづり細粉充滿せり  
其粉の白色或は青白色あり○禹餘糧

ゆづり

後世のゆづりたまるおあど散水伊勢齋宮  
小侍ゆづりゆづりの石あせとゆづり事

せせせ給ふ祭月の宴御前召ゆづり基ゆづりゆづりゆづりゆづりゆづりゆづり  
ゆづりゆづり拾遺東宮の石なるゆづりゆづり

ゆづり(俗)

くまゆづりのあぶらの  
下小注せ

ゆづり(俗)

石名あゆづりの  
下小注せ

ゆづり(俗)

石名からゆづりの  
下小注せ

ゆづり

東帯の時用ある石帯なり饒り玉瑪瑙  
犀角あゆづり石あゆづりも用あるなり和紀

伊石帯出雲石帯越前石帯夫三初ゆづり我身あゆづりゆづりゆづりゆづりゆづりゆづりゆづり  
て小人をうけ見んと装束拾要抄上石帯有文巡方帯節會行幸行啓列

見定考以下公事又無止事佛事拜賀加茂諸御賀等高  
位人用之文事鬼形獅子形唐花唐草等也非一様

しのおま

倚子の御座なり天徳歌合後涼殿のこた  
とのふあうて西むれふりのおま

ひくわ

しのみまのむね

筑前俗 虫名まむむの  
下小注也

しのかげ

聖妻の異名散水中をさへふりひの心  
とよせ君代例ひひるん春日野の石の

竹あも花され  
みけ

しのおち

山中洞穴の中ふ垂を生むる  
石ゆり形水柱似たり大

ある柱の如く小ちる筆管の如く其色白く或は黄を帯ぶ其内實まると  
ありやう空なるあり空あるものを鶯管石と云ふ三實ニ七日癸巳詔云云於  
備中國採石鐘乳和石鐘乳  
出備中國英賀郡和名知

しのおち 讃岐俗

讃岐河東郡安原村の數丈絶壁の石面よ  
り流出る乳汁の如きめのふりく石髓の

性弱きめのあう  
○地脂

しのおち 俗

石名りのちふ  
同ト

しのおち

石ゆり造まる鳥居をりふ太平六矢たてを  
取出し石の鳥居は何事と云ふ

筆わね  
つね

しのおま

石の階ゆりイシダン小同ト源須磨石の比  
松の柱のわらうなるをのうら夫州石の比

松の柱ゆりまをなまき老を  
あつう山ぞゆり

しのおち

石をうちを出き火を云夫十九りの火小此身を  
よむ世中のつねあむむを思ひ知るかか

しのおち

石ゆり作る枕をり廻國雜記つとがの  
くつる世もなれ石枕さるお思ひある

らめ六帖五 ひとり糸の床ふたまるるあ  
ゆい石の枕も浮ぬらあり

しのおち 俗

しのおちの  
下小注也

語彙

いのみま

石の御座なり常陸鹿嶋神宮のおくあり  
今俗要石といへるもの後偽作あり 天世三  
たづねらるる松のつるわらちをゆふるまのねのねのりの

いのもか

のち霞の花  
あやむらひつ  
巖石あど平なる所と床といひあたる  
あり 捨遺愚草 山人もまぢるゆくのり

いのもたき

石名のい  
ちゆ同ド

いのこた

菌名ちどめの  
下小注也

いぶえ

魚名ぶえの  
下小注也

いぶえ

草名ぶえがとの  
下小注也

いぶえ

石階の義ゆて石を重箱と高き處小登る  
道とゆふ 蜻中 めねへることたびくあり

ぬ一町のやどとをいふもわりのわり  
あどまね 類名 燈 伍三

いぶえ

石ゆて作る橋をいふ 宇拾 西院のへん  
ちゆありと石橋ありける水のちとを

和石之波以石橋也  
類名 石 伍三

いぶえ

吹弩枕石之類十物 天武紀 大角小角鼓吹幡旗及  
建大木置石其上發機以投敵也 和檜 推古紀 鼓

いぶえ

彈碁の類といふ 宇祭 男女  
かきとて石をいふ 志給

いぶえ

蝦類あとの  
下小注也

いぶえ

草名のいぶえの  
下小注也  
礪を焼たる石粉なりある蚌蛤蠣殻を焼  
たるかひいぶえといふ 本和 石灰

いぶえ

焼く石灰あを石ゆて灰白色微青を  
帯ぶ或り白色微暗を帯ぶのあり近江



いしづらん (俗)

石蓮の類其狀牡丹  
花小似たるもの

いしがとけ (俗)

石のく癖め  
佛像をいふ

いしま

石間いそ岩間いそ同ト後撰天川冬氷  
小とちたきやゆいあやなきり音だめせぬ

源朝ま氷とぢりゆいあやの水行あやと  
空まじ月のかげをちりさる

いしま

ゆがものあまをいふあり以字盛イシマア  
元永元年内大臣家歌合水もろろ玉だまの

いしま  
かめあとの石間あらし  
こらしを侍る

いしまめ 長門 (俗)

草名まめづこの  
下小注を

いしま

罷名あまをいふ散水上心ぎ深きと谷小  
つたあらしをいふあまをいふあらしをいふ

又中君とあまの原あまをいふ  
賤のいしまのまを深く思ふ

いしまかん (俗)

あらしをいふあらしをいふあらしをいふ  
あらしをいふあらしをいふあらしをいふ

一年生の蔓草をうり葉三角ゆいて互生して莖葉共小刺あり花蕎麥の如く  
紅白後圓き實を結ぶ緑碧紅紫白黒相離る ○扛板歸

いしま

塵添埃いしま不イシマ苦イシマ非イシマ窟イシマ

いしまん (音)

平常小異ある人をいふ我が國  
あらしをいふあらしをいふ

いしまん (音)

禪宗の語より出て言語を以て教へがら自ら  
會得べき藝術をいふ ○以心傳心

いしまち

魚名あべらちのいしまちを通トいふ名あり  
大小とも形状略鯽魚小似狭く長し鱗

長し鱗細く頭短小ゆいて尾小岐なり肉脆く脂少し  
○石首魚和鱈イシマ其頭中有石故亦名石首魚

いしまち (俗)

魚名いしまちの二三寸の  
ものといふ

いしまち (俗)

魚名いしまちの  
下小注を

いしまち (俗)

魚名いしまちの  
下小注を

いしまち 伊勢 (俗)

草名いしまちの  
下小注を







いゝる

井のめぐりを石ゆく圍をたるとりふ  
賀の山越ゆるゆるのめぐり云云むとふ  
手の平ふゆぐる山の内のあうでも人ふも色ぬるか  
水ららるるか繪ふかぬらるるを  
散木中 ひまだおめる山くるかたの石井づくあ  
あらゆるもたむ  
ころくや

いせ

いふ同ト 禪僧の語なり  
慶節 椅子

いせ 東京俗  
出雲

水名ゆせの  
下小注を

いせい 陸奥津輕俗

愛の意  
なり

いせか

鳥名大さ拙老婆の如く頭背蒼赤胸腹赤  
紫其嘴蒼くと 齧齧然きとも能荏子禪等

を拾ひ食ふ○沙仁鳥  
古節 鷓類聚往來 鷓

いせがは

記中 伊須久波斯久治良佐夜流  
障あり 勇を伊須とゆふい佐と須と音通

あまのちう 鯨を古へ伊佐といひ  
小勇魚ともかけるゆき明らけ  
久波斯の名細花細あまの類めく美稱る

詞あり 鯨といふむさめ小先其物を美る詞を  
置けり上のゆきあまのの條見合せ

いせがは

ガギグゲ

いせがは

いせがはの體言あり 祝詞式 大嚴祭 夜女能  
伊須々 伎伊豆都志伎事無々  
驚き 騷ふとゆふ 祝詞式 大嚴祭 夜女能 伊須々  
伎伊豆都志伎事無々 記中 其美人驚而立

走伊須須  
岐伎

いせのみ

水名 蚊子の水の  
下小注を

いせの

蚊子 水ゆく造  
きる 櫛あり

いせの

柚子 未替の  
轉訛

いせの

心のまじらふよまじらふをゆふなり 祝詞式 大嚴祭 神  
等 伊須呂許比阿禮比坐 予言直志 秘志 坐

いせ

○異姓  
他人の姓をゆふ

いせえび

俗 ○ちちえび ○えびうね  
海蝦類の大あるゆのをう 兩眼紫黒小  
し高く突出し 口邊四鬚あり 其二ハ

長針の如く根は硬刺あり頭殻の肌鹿ありて毛あり  
全身紫黒色光滑あり ○龍蝦

いせねーろい 俗

輕粉の下  
小注

いせねんど 俗 ○かみきねんど

伊勢松坂の俗謡あり  
他國より稱する語あり

いせごひ 山城 俗

魚名、うちめの  
下小注

いせごひ 阿波 俗

魚名、こぶごひの  
下小注

いせごしら 俗

櫻、一種、重瓣赤を  
帶る者

いせつ 音

人小異ある説あり  
運歩異説あり

いせつむね 俗 ○きんげつむね

山茶の重瓣ある者、下の五瓣大あり、中  
小細瓣多く簇り、千葉の罌粟花の如く

ある者を  
いふ

いせごらふ 豆腐音

豆腐を再製する食物あり 料理物語山の  
いふをわらう、鯛をわらう、さうらの三分一

のき、とうふ玉子のちりめんを加へたる、何れ一ふより、さう合せ、杉の箱小布を  
ちぎ入つて、ゆをこし、さきう、らむがやうにかけ候る、さう候

いせのらみ

催馬樂律の曲名 催馬樂 伊勢海伊世乃  
宇美乃支與支名支左介

いせのうみがた

御産の時より、さう給ふ物と云、後宮名目抄  
伊勢の神垣の御産は臨ませ給ふ時の御よ

うそひの  
物なり

いせばらうらう 俗 ○たうらう○やはやうらう

諸國の海濱に自生する草  
ありて、其葉の一柄三亞を

あ、各三枚着ける、前胡の如くあり、小あり、其莖紫色四月  
花を開く、攢る傘形に似たり、此嫩葉を膾炙して食ふ

いせばら 上總 俗

さうむらひの  
下小注

いせはるび 俗 ○あんとう ○のぎま

灌水様の小草ありて、冬を経る萎まき高  
一尺許、葉蓼に似る對生花、夏月莖上小

葉を鱗次せる花穂を出し、淡紫花を開く、  
五出あり、大き四分許あり

いせびと

風俗歌の曲名 風俗 伊勢人伊世比止波  
安世之支毛乃乎也奈止天戸波

いぜん 音

こ色より前なり

いせん 能登 俗

○以前  
草名からその名ん  
どうの下注を

いせやひらが

次第の不同ゆへにさだまらぬをたゞしき  
詞知顯抄あることの次第不同ゆへにさだまらぬ

あらしひらひらうさやなることとせや  
ひらうのとりのひらうさやなることとせや

いせのかめ 俗

伊勢小産するものゆへに  
最上品なり

いせどのあま

伊勢の海人の意あり 後撰 意三  
山いせどのあまのまを夜まやあねうと人や

さるらん 源須磨 うきのかのいせのあまを思ひ  
やまもーやたるうままの浦め

いそ

五十をりふ 六帖 岩の上の松の梢よる雪  
いそをかへりふ 後撰 さるらん

いそ

もと海邊の石ある處をりふをいそと云ふ 轉ド  
て海のわらうをりふ 万七 伊曾さる小海夫の

釣舟さる小けり我船さるん 伊蘇の  
さるらん 字 湄 伊蘇 慶節 磯

いそ

冠のひらひらをりふ 文毛格式 冠名呀  
いそをりひらひらをりふのことなり

いそあのみめ 紀伊 俗

魚名かんざいの  
下注を

いそく 俗

心の勇と進び  
形状をりふ

いそくがひ 俗

蟹類おめがひの  
下注を

いそひら 俗

鯛小片を加へたる  
羨をりふ

いそがき 〇ころれ

牡蠣の一種小なるものあり 〇梅花蠣  
宮内式 諸國例 貢御 贄 伊勢 難好

いそがく ラリルレ

急がく 大鏡 急がく  
急がく 大鏡 急がく

いそがひ シラシキ

事あや 急がく 急がく  
急がく 急がく 急がく

あらしき 源 未摘花 やが 急がく 急がく  
急がく 急がく 急がく

けり 夫 急がく 急がく 急がく  
急がく 急がく 急がく

いそがま

カシズレ

他をいそがまをさるる

いそがま

かー給つが蜻中  
かー給つが源桐壺

いそがまをさるる

いそがま

字類抄 忿忙  
又 驟イ

事おわく

いそがひ

いそがひ

いそがひの如く鳥嘴の如く白質中て外面  
褐色あり其品種類多し

磯邊小寄来る介類の殻をいそがひ

いそがひ

いそがひの

いそがひとあまを戀の片思小  
たて冠らせたるあり

介名よめがまらの  
下小注を

いそがひ

いそがひ

いそがひの如く鳥嘴の如く白質中て外面  
褐色あり其品種類多し

いそがひ

いそがひ

いそがひ

いそがひの如く鳥嘴の如く白質中て外面  
褐色あり其品種類多し

いそがひ

いそがひ

言

他をいそがまをさるる

いそがまをさるる

事おわく

磯邊小寄来る介類の殻をいそがひ

介名よめがまらの

下小注を

いそがひの如く鳥嘴の如く白質中て外面

褐色あり其品種類多し

いそがひとあまを戀の片思小

たて冠らせたるあり

五十返あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそがひの體言又俗の支度の意あり

いそくろろぎ 肥前俗

杜仲の一種まさるの  
下小詳小せり

いそぐんちよ 俗

○いそぐんちよのり  
○いそぐんちよ

小笠原嶋小自生多し海  
邊岩石の上小這ひ生む

といふ、小き灌木水ゆして冬月葉凋まむ、但一寒を怯る、田名冬月の塘中  
小育ふ葉山椒小似く小一夏月白色五瓣梅花の如き花を開く後小圓  
實を結ぶ  
○小石積

いそー

いそーの體言勲功をいふ  
美五十述手曰伊蘇志續紀十六仲哀紀天皇即  
天平勝寶二年三

月戊戌駿河國守從五位下猶原造東人等於部内廬原郡  
多胡浦濱獲黃金獻之於是東人等賜勤臣姓

いそーき

シカシカ

いそひより出て勞むるをいふ又たたらくを  
いふあり續紀十七伊蘇志宇牟賀方四蘇

和氣とちめむもあらむ源御幸  
のつろちのうたぬさふやくも立をさうやまてくちとひありきつ

いそぢ

五十年あり續古釋教かどあまのちやちの  
里小わらへていそぢあまのちのしどへまける

いそぢ

磯路あり拾遺愚草上海こころる浦こ舟の  
いそぢ小いそぢを過てぬきいそぢかま

いそぢどろ

磯邊小とるちとるを云天十七旅宿らきや  
のいそぢと千鳥あまのちの袖とらや

いそぢどろ

食類いそぢの  
下小注也

いそぢのやま

五十年の闇ゆく妄執の久しを云新古雜上  
秋とく月をあらむる身とあまのちいそぢ

のやまを何  
あまのちらん

いそつぐ

○いそつぐいそつぐいそつぐ  
○いそつぐいそつぐ

鳥名、南才海邊小棲ひ形白頭公  
小似く肥大尾も亦長し頭背胸

等青黒色腹の赤黒色小星白の斑文あり  
美あり、轉聲低く聞小足らむ

いそな

○いそな

磯小生る食用小まき草をいふ古今東歌  
ころろぎのいそなあらしいそなつむめさ

いそなまあわたり小まき浪夫廿六浦人のとるやいそな  
たのむらんひびの灘の五月雨のころ

いそなごさ

俗

前條小  
注也

いそなどろ

鳥名、呼潮の一名吳竹いそな  
どろ、千鳥の事あり

いと糸

ゆくむら  
さねの浪

いと糸

磯邊小寝るをいふ糸の寐あり 月清四松  
嶋や秋風さむねの糸を糸なあまのかるを  
ひく糸物あり 夫廿六清き糸ひく糸の糸の  
よ中月も山嵐もころも糸あり糸

いとのか

名あるを常小石上あるの神杉あど地名と重なるいひきた  
まるを今雨の降小糸ひありて枕詞と志す

いとのか

いとのかあるとつぐ枕詞あるとやぐ  
古きよふのひあせるなり 拾遺春春の糸  
あつぞうちもるいとのかとめづらげ糸山田あまも 新拾意白露の糸  
ふーたまをこひつらんよもいとのかのうもあ

いとのかの糸

草名、いとがらん  
志す小同ト  
磯の出たか所の所あり糸の出きたあり 記上  
加岐微流伊蘇能佐岐波知受 万三 磯前糸

いとのか

たよゆけいあふみの海八十の  
湊小嶋さりのあり

いとのか

加キカケ

いとのか

ハコフヘ  
伊蘇婆比座興りか  
るがとめと

いとひよ

いとひよ俗 鳥名、いとつぐみの  
下小注志  
魚名、志まきわわぐの  
下小注志

いとべ

あんとあまのりきり火市の光をせ  
いとべの波のさうもよわらぐ

いと

磯間あり間内の意 万九 ちんちんの過小  
いとらとたぐきひくあまひ 磯麻とまか

あゝも 六百番歌合 ころめあはれのとまがくもや  
ころ浪の音どわたりめも袖めくせとや

いそやうら

海邊小旅糸にて岩根をまらら小あゝころ  
あり 万十ころ戀る小のわのおもこころひもろ

天のくろらゆ  
石枕巻

いそやうら

磯の上小生ひたる松あり ○磯松 万サに  
きよろらふのあらら伊蘇麻都のつ糸

小のくろらね今も  
見るごと

いそやうら (俗) 〇いそやうら

小灌木わらへ伊豆海邊小生む其幹痺菜  
根の如く細葉枝梢小簇り昔き葉間莖を

抽五辨の細花攢り  
関く其色紅又黄

いそやうら (俗) 〇いそやうら

暖地の海濱小自生する宿根の蔓草わらへ  
て全形豆小似く小一葉長さ二寸餘豆

い扁豆の如くくくく楮黒色あり  
毒あり食ふべからず

いぞん (音)

異存の音あり人と  
意の異ありとらふ

いそむし (俗) 〇たひのまら

棘鬣魚又鰈魚あどの口中小往々含める  
虫あり形ふむむふ似たり

いそんぶら (俗) 〇いそんぶら

射ソコネルをいふあり 太平十六 遠矢をいそん  
とて敵をかくらるれ

いそめだ (俗) 〇いそめだ

いそめだをいふあり 辨内侍日記上 権大納  
言萬里小路冷泉大納言あどそのま

いそめだ (俗) 〇いそめだ

魚名もろむの  
下小注

いそもと

とらふいそもとのとらふあど根の意  
あり 万七 わや海の磯本ゆきりたつ波の

いそもの (俗) 〇いそもの

海菜をいふ 十六夜日記 いそものあどのとら  
むいそものあつとあつめ

いそもの (俗) 〇いそもの

虫名寄居虫の  
下小注

いそや (俗) 〇いそや

いそやをいふわあど 漁人あど磯邊小住  
む家あり 千載 藻を磯屋ヶ下小

吾言 吳一、 いそ



もる時雨たびび絲の袖も  
志やうまよとや

いそやうれ

いそやうれ (俗)

いそらうざんげ

いそまじんげ (俗)

いそわ

とやうとやうとやうとやう  
ゆくとやうと

いそわ (俗)

上小同ト夫サハあまをてく人もわらぎさうの  
磯やうりのよりあまのまこころうまじん

麩粉中淡醬油と和し銅盤カネゆき薄くやれ  
小豆餡をつくるそのをりや

催馬樂の曲名あり神樂譜磯等ササ前伊曾  
良加左支仁太比川留安方乃

暖國小産むる草ありて其葉厚くきりん  
かゝの葉の如く性霜雪をおとる

うらとさうとさあどのころ小同ト田タの下小注は  
万七塩シホとやうと磯田イソタ小とまが入朝アサする海人

鵬カの一種小ゆとて  
海邊小拙者あり

語彙卷六

